

モトカレ !! 2

Contents

モトカレ!! 2	5
番外編 それからのふたり	285

モトカレ!! 2

第一章 微妙な距離感

それは静華女子高校の教師、橘権理が『モトカノ』である谷村メイ宅に無理やり転がり込んで、二週間目の月曜日のことだった。

相性のいい『モトカノ』をカラダで縛りつけてやろう。だなんて、この上なく純粋に邪な気持ちを抱いて始めた同居だったが、「メイは私が守る!!」と宣言する、無駄に屈強なメイの親友、大島絹までも押しかけ同居人としてやってきて……

これ以上の邪魔などお断りだというのに、さらに権理を邪魔する問題が湧いて出た。

「橘君。君、今週から秋月樹奈さんの家庭教師をやってくださいね」

「は、はあ!？」

普段は動揺なんてしない権理がこの時ばかりは、職員室で素っ頓狂な声を上げた。

秋月樹奈はこの静華女子高の生徒だ。谷村家に引越す前は権理の自宅にお手製弁当を持って押し掛けるほど彼に執着していて、今も引越し先を知ろうと躍起になっている。樹奈の祖父はこの有力理事で、さすがの権理も無下にすることができず困り切っているのだ。

正面にいる教頭は、後ろめたいのか、権理の目を一切見ようとしない。

「あの……教頭。意味が分からないのですが」

「橘先生には申し訳ないと思っっているんですよ？　しかしですねえ、秋月さんからのご指名なんです。しかも秋月グループ会長であるおじい様からの」

権理は締めつけられるような頭の痛みに、思わず眼鏡を外して眉間を揉む。

秋月グループの会長……まさかそんな人物から、こんな非常識な要請がなされるとは。

しかし、彼の直々の要請を断るなんて、教師生命をドブに捨てるようなもので……往生際が悪いと思いつつも権理はつい反論してしまう。ごく当たり前の、常識でもって。

「ですが教頭。私は秋月樹奈の担任ではありませんが、教科担任ではありません。もちろん、彼女の受けるテストだって私が作っているわけですし……さすがにまずいのでは」

「しかし、秋月会長からの要請なんです」

きっぱりはつきり言い切る教頭と権理は数秒見つめ合い……そしてほぼ同時に深い深いため息をついた。

権理も教頭のどうにもならない立場は分かるし、教頭としても権理の不平不満を言いたい気持ちがあるに違いない。互いの瞳に、相手を憐れむ光を見つける。言った方も辛ければ、言われた方も辛い。言い換えれば、権理も教頭も被害者だ。では、加害者は？

くそ、秋月樹奈め……!!　とうとう強硬手段に出てきたってわけか。どうお仕置きしてくれよう、あのクソガキが!!

けれどあの樹奈ならば、権理の『お仕置き』も嬉々として受け入れそうな気がして、彼は一瞬そ

の場に崩れ落ちたくなる。

「と、とにかく橘君」

「……はい」

「このお話、受けていただけないと私が校長にどやされるんですっ」

教頭が権理の視線から逃れるように顔をそむけ、わざとらしく目頭を押さえる。

既に五十を超えたおじさんの泣き落としなど、これっぽっちも心に響かない。けれど、権理にこの命令を断れるはずもない。

先ほどからの頭痛は絶賛継続中。原因はストレス以外にあるはずもない。胃に穴があいたら労災は適用されるのだろうか？ と、権理は本気で疑問に思った。

「橘先生、お願いできますよね？」

「……………はい」

嫌々ながらの返事。でもそれ以外の選択肢など思いつかない。まだ失業なんてしたくないから。

「せーんせっ」

放課後、化学実験室の片付けをしていた権理の背中に、甘ったるい声がかけられる。

その声の主が誰か、権理はすぐに分かってしまった。……分かりたくもないのに。

イラッとした気持ちが湧き上がったものの、心を落ち着かせようと大きく息をついて、権理は中指でついと眼鏡を押し上げた。『教師、橘権理』としての顔を完璧に作り出す。

「ああ、秋月さん。忘れ物ですか？」

わざと何事もないように問いかけると、樹奈の笑い顔が急に不機嫌そうになる。

「あれ？ 先生、何も聞いてないの？」

「何がです？」

あえてそう言ってみれば、樹奈は頬を膨らませた。

「何がって……まさか先生、あの話、断るつもりじゃないわよね？」

樹奈は、それがどういふことか分かるよね？ と言わんばかりに無言の圧力をかけてくる。

秋月グループ、それも会長の要請を学校側が受けないはずがない、という自信がその瞳にはみまぎっていて。それが権理の気持ちをより沈み込ませた。

本当なら、こんな世間知らずなお嬢様の言いなりになどなりたくはないのだ。けれど権理としてはそれを口に出すわけにもいかない。

「家庭教師の話ですか？」

「そう!! なんだ、ちゃんと伝わってたのね。よかったー」

樹奈の嬉々とした表情を一瞥して、権理は再び大きなため息をついた。

「ちゃんと引き受けてくれた、よね？」

「そうですね、引き受けざるを得ないようにしたんでしょう？」

軽く嫌味を言ったつもりなのに、樹奈は満足そうにっこりと笑った。

「そうだよ。先生にもっと樹奈のこと知ってほしいの。逃げようなんて思わないでね？ ……逃げ

たらどうなるか、頭のいい先生なら分かるよね？」

自分のものではない権力を笠に着て、堂々と胸を張る樹奈。そんな彼女の態度に、権理は怒りよりも情けないような気持ちになり、再びため息をついてしまう。

そう、記憶の底に封印してきた、思い出したくもない昔の『誰かさん』によく似ていて。

「そうですね、分かります。断ったら大変なことになるんでしょうね」

「そうよ」

えっへん。

胸を張る樹奈に、今度は苦笑いが漏れてしまった。

やっぱり似ている。『誰かさん』——いきがっていた過去の自分に。

「なら引き受けてくれたのよね？」

「そうですね、それ以外に丸く収める方法なんてないんでしょう？」

「あら、そんなこともないわ」

「そうなんですか？」

思いがけない言葉に権理は教材をしまう手を止め、彼女をまっすぐに見つめた。そんな権理の瞳に何を勘違いしたのか、樹奈は頬をぼっと染めて恥じらったように体をくねらせる。

けれど口から出たのは、恥じらいとは程遠い言葉で。

「先生が樹奈のものになってくれるなら、こーんなまじろっこしいことはしなくていいのよ？ もうあつさり樹奈のものになっちゃわない!? 一生不自由なんてさせないわ!! 逆玉よ!! 秋月グ

ループは先生のもの!!」

「……家庭教師、頑張りますね」

爽やかすぎる権理の笑顔に、樹奈はちっと舌打ちする。

「やっぱりこんな手には乗らないか」

なんて悔しげな独白は、言うまでもなくスルー。

とにもかくにも引き受けてしまった家庭教師。授業の時には、樹奈からのパワハラ、いや、セクハラ（？）が待ち受けているだろう。

しかし権理にとっては、メイとの時間がかかり潰されてしまう、ということの方が大問題だった。

「へえ、家庭教師？ 自分の高校の生徒の？ そんなことってあるの？」

夕食の手を止めて、メイが至極当たり前前のことを口にする。つい今しがた、権理は週二回家庭教師をするから帰りが遅くなること、その日は夕食が作れないことをメイと絹に告げたのだった。

「普通は……しないでしょよね。でもするんです」

複雑な気持ちでそう答えると、メイは「ふうん」とやはり不思議そうにうなずいた。けれどそれ以上は詮索してこず、権理としてはほっとする。

「で、週二回って何曜日なのよ」

目は口ほどにものを言う、とはよく言ったものだ。しゃべらなくても、自称『メイの保護者』の絹が、この件を心底喜んでいるの是一目瞭然。

「何曜日と何曜日よ。ねえ、橘権理」

テーブルに肘をつき、にやにやと視線を寄こす絹を、権理は本気で殴ってやりたい気にさえなる。けれど、いくら絹が空手師範代とはいえ女性を殴るわけにはいかないし、それ以前にもしそんな素振りを見せようものなら間違ひなく返り討ちにあうに違ひない。それは避けたいし、何よりも今は精神的に疲れていて突っかかる気にもなれない。

「……火曜日と金曜日ですよ。その日は夕食を作れませんので、よろしくお願いします」

ため息混じりにそう言えば、メイが心配そうに権理の顔を覗き込んだ。

「ねえ権理、何だかずいぶん疲れてるみたいだけど、その、大丈夫？」

そんな心配そうなメイの瞳に、権理はふつと柔らかに表情を崩す。手を伸ばしてメイに触れたいと思つたものの、絹の厳しい一言に動きを止めた。

「もうっ!! メイったら本当に優しいわ。甘すぎるわよっ。疲れたふりで油断させて、あんなコトやこんなコトをしちゃおうとか考えてるに違ひないんだから!!」

——なるほど、そうやって油断させる手も確かにあるな。

だなんて絹が知ったら激怒しそうなことをぼんやり思いつつ、権理は苦笑いして見せる。

「絹さん、ご安心を。今日はもうそんな気を起こすつもりはありませんから」

「今日は、ですって!? 一生そんな気を起こすんじゃないわよっ、このエロ教師!!」

「ま、まあまあ絹ちゃん」

鼻息も荒く、今にも夕食を蹴散らしテーブルに足を載せそうな絹を、メイが必死に宥めている。

そんな様子を横目で見ながら、権理は再び大きくため息をついた。

その日の夜も更け、自室で寛いでいた権理はベッドの端に腰掛け、本日何度目になるか分からないため息を盛大に吐き出していた。

まさか権力の名のもとに無理やり動かされることが、こんなにも腹立たしいとは思つてもみなかった。そう、家庭教師が面倒、というよりも、権力に強制されるということへの不快感の方が、権理にとつては強いストレスとなつているのかもしれない。

何よりも、だ。

メイとの時間まで有無も言わずに潰されるのが腹立たしい。

あからさまに権理の不在を喜んでた絹。彼女の言葉などこれっぽっちも気にはならない。けれど、同じことをメイも考えていたら? 自分が不在になることを喜んでいたら……? ?

そんなことを考えると堪らなくなる。

やり切れない気持ちを振り払うようにもう一度息を吐き出し、緩くウエーブした髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き交ぜた。

ふと三年前のメイの笑顔が脳裏を掠める。

全てを斜に見ていた自分の目を覚ましてくれた、あの笑顔が。そしてどこかほつとしたような、それでいて焦れたような気持ちになる。

やっぱりあの時、消えたメイをなすりくり構わず探し出して、二度とどこへも行かないように閉じ

だめてしまえばよかったんだ。

そんな危険な考えが頭をよぎった時だった。キッチンの方からかすかな物音が聞こえたのは。権理はそつと部屋のドアを開けて耳を澄ます。やはり何やら物音が聞こえてくる。

何となく気になってそつとキッチンへと向かう。そこにいるのが絹だったら、そのまま戻ろうと思いつつ。

でも、もしもそこにいるのがメイだったら？

自分を制しきれず、メイに乱暴なことをしてしまうんじゃないかという不安さえ浮かんでくる。

先ほどまでの妙な焦燥感が、じりじりと内側から権理を侵食していた。それなのに、足はキッチンへと向かってしまう。

そして居間のドアを開け、そつと覗いた先にいたのは。

「あれ、権理。権理も飲み物取りに来たの？」

「メイ」

冷蔵庫から缶ビールを取り出していたメイを見た時、何故か権理はほつとして口元をほころばせた。

「権理もどうぞ」

「どうも」

にこにこしながら権理に缶ビールを差し出すと、メイは流し台に寄りかかるようにしてビールを飲み始めた。

薄手のパジャマにカーディガンを引っ掛けただけの、無防備な姿。先日の引っ越し祝いという名のどんちゃん騒ぎから、メイの警戒心は確実に薄れたらしい。

確かに笑ってもらえるのは嬉しい。

でも、無防備すぎるのは男として見られていないようで、それはそれで駄目なのだ。

「ねえ権理」

「何ですか？」

権理もビールを開け、冷蔵庫にもたれかかりながらその冷えた液体を喉に流し込む。

「食事のこと、心配しないでいいからね。私だって一人暮らし長いんだし、大丈夫」

相変わらずにこにここと笑顔を決やさないメイのセリフに、さつきまで美味しいと感じていたビールが、口の中で急激に苦みを増す。

「何なら当番制にした方がいいんじゃない？ 権理だってその方が心配なく仕事できるでしょ？」

無邪気な、善意からの言葉と知りつつも、権理はつい悪意を込めて解釈してしまう。

……大島絹と同じように、メイも俺がいない方がいいということなんだな。

めきつと権理の手の中で、アルミ缶が悲鳴を上げて形を変える。そして権理は変形した缶を強く握りしめて、その中身を一気にあおった。最後の一口は飲み込まず、口の中に残して。

「わあ、いい飲みっぷりだね」

権理から出る黒いオーラに全く気付かず、メイはその飲みっぷりに感心している。

その呑気で穏やかな表情を崩してやりたくて、権理は一気に彼女との間合いを詰めると、その顎

を掴んで上を向かせた。驚いて自分を見上げているメイの唇に、ためらいもなく唇を押しつける。そして、口の中に留めていたビールをメイの口に流し込んだ。

メイの丸い目が見開かれた。顎を持ち上げていない方の手で、メイの後頭部をしっかりと抱えこみ、逃げられないように固定する。何度も何度もメイが拳で權理の胸を叩きつけたけれど、そんなものは少しも妨げにならない。

無理やり口内へビールを流し込まれ、苦しげにもがいていたメイの白い喉が小さく上下する。全て飲み込んだことを確認して、權理は唇を離し、にやつと笑った。

その途端にメイが咽こむ。そして、涙交じりの目で權理を睨みつけた。

「っ、なんのっ、つもり……!?!」

その視線は、もうさっきまでの無防備なものではなく、危険な男を見る、そんな視線。

權理は目を細め、再びメイを引き寄せると、唇が掠めるくらい耳元近くで囁いた。

「何のつもり？ それは俺のセリフですよ。俺が留守がちになることを喜んでるんでしょうが、安心しない方がいいですね。俺は『羊』になる気はありませんから」

そう言うと、權理はメイからそつと離れた。そして固まったように目を見開いて見上げてくる彼女の顔に、そつと唇を寄せる。

「いつだって襲う気になれば襲えるんです。メイは隙だらけですからね。だから、気をつけるんですよ。誰にでも隙を見せたりしないように」

今度ゆっくり料理してあげましょう。

そんな一言も丁寧添えて、權理は自分の部屋に戻った。

自分の存在を色濃く印象づけられたことにほっとしたような、そして『警戒心のないメイ』という存在を失ってしまったことに焦れたような、矛盾する気持ちを抱えたまま。

去っていく權理の足音を聞きながら、メイはずるずるとその場に崩れ落ちた。心臓がうるさくて、思わず耳を塞ぐ。けれど、自分の内側からの音を遮られるはずもなく、それどころか余計にはつきり感じてしまい、ひどく動揺する。

引越し祝いだと飲んだくれて、すっかり打ち解けられたものだと思っていたのに。もう安全だと警戒心を解いたのに、わざわざ『危険』をアピールされてしまった。

「ひ、『羊』になる気はないって……何よ」

それはつまり、これからも權理を『狼』として意識しなければならぬということ。この先、隙があれば、あんなコトもこんなコトもされちゃうかもしれないということ……

「……どういう、つもりよ」

そう呻くように呟いてみても、メイに權理の考えていることなんて分かるはずもない。

ただ、先ほどまで触れ合っていた唇が未だに火照り、びりびりと痺れてしまっていることだけははっきりと感じとれた。

「メイ、どうしたの？」

不意にかけられた声に、メイは文字通り飛び上がった。

「絹、ちゃん」

恐る恐る上げた視線の先には、メイ同様、パジャマ姿の絹が心配そうな眼差しを投げかけてきていた。ほんの少し寒そうに、羽織ったカーディガンの前をしつかりとかき合わせて。

メイはごくりと息を呑む。未だに収まらない鼓動と、熟れたリンゴみたいな赤い顔。

何かあったんだと見透かされそうで怖い。もし絹に「何があったの」と追及されても、頭の中がこんがらがっていてごまかせる自信もない。

ごまかす……？

浮かんだ言葉にふと違和感を覚えた。本当に権理にあんなコトをされるのが嫌ならば、ごまかさずに絹に全部言えればいいだけのこと。でもそんなことをすれば、絹は容赦なく権理をボコボコにした上で、この家から追い出すだろう。絹にそんな乱暴な真似はさせたくない。でも……それ以上に。

「メイ？ やだ、顔真っ赤じゃない」

「え？ そ、そう？」

怪訝そうに顔を覗き込まれ、メイはつい視線を逸らしてしまう。けれど、絹の手に頬を挟まれ、無理やり視線を合わされる。

「……まさか、メイ」

「な、何？」

ぎくり。

思わず声が裏返った。

「また熱でも上がった？ この前熱を出したってあいつが言ってたじゃない」

「熱？」

「そうよ。寒気はない？ 大丈夫？」

「だ、大丈夫。その、ビールを飲んでたから、きつと酔いが回っちゃっただけ。それだけだよ」

「熱はないみたいね。でもこれから上がってくるのかも。部屋に戻って休みましょう？」

「うん、そうするね」

「よし、じゃあ背中に乗って。連れてってあげるから」

そんなことを言っただけ、絹はメイに背中を向けて屈んだ。

この年になっておんぶはないし、歩ける、と言ったものの、絹から発射される純粋な親切ビームに負けて、メイは結局部屋まで絹におんぶしてもらった。

ここまでくると、過保護ぶりも少々行きすぎな気がする。

とりあえず部屋まで送ってもらったことにお礼を言うと、絹は上機嫌で口を開いた。

「メイ、アタシほっとしちやっただわ。あのケダモノがたった週二回だけでも、帰りが遅くなるのよ。これで少しは安心して過ごせる時間が増えるわね」

「そう、だね」

その返事があまりにも曖昧な響きを帯びていたことに、言ったメイの方が困惑する。けれど絹は、幸い気がついていないようだった。

「アタシも帰りが遅くなることがたまにあるから、その時にメイが何かされてるんじゃないかと思

うと気が気じゃなかったの。週二回だなんて言わずに、毎日家庭教師やってればいいのよ」
興奮気味にまくしたてる絹に相槌を打ちながら、自分でも掴みきれない感情に、ただただ困惑するしかないメイだった。

翌日仕事を終え、職場である病院の職員出口から外へ出ようとしていたメイを呼びとめたのは、メイと同じく医療事務に従事する先輩の河本貴史こうもと たかふみだった。

「谷村さん、そういえば体はもうすっかり治ったの？」

ずり落ちた眼鏡を直しながら、人懐っこい笑顔を向けてくる。

「何だか時々ぼんやりしていたみたいだし、まだ体調が万全じゃないのかと思って」

「体調、ですか？」

「そう、先週熱を出して休んでいたから。……本当はもつと早く聞きたかったんだけど、ちょっと忙しくてなかなか谷村さんに聞けないでいたんだ」

照れたように頭を掻く河本に、思わずメイの心臓は少女漫画チックに『キュン』と鳴った。

絹曰くいぶの『ケダモノ権理』とはあまりにも違う接し方。

権理ならば、間違いなく心配したふりをして無体を強いるに違いない。つい先日さきの『坐薬事件』ざやくが思い出され、メイは不条理な敗北感に打ちひしがれる。

さらに、昨日は再び権理の危険さを認識させられている。そのため河本の優しさあふ溢れる無欲な発言は、メイを心底感動させた。

「はいっ、大丈夫です。ご心配ありがとうございます!!」

満面の笑みで答えると、河本がはにかんだように笑う。その笑顔に、またもメイの心臓は打ち抜かれた。

なんていい人なのかしら……!!

後輩をここまで親身に心配してくれるなんて。しかも仕事を休んで迷惑をかけたはずなのに、こんなに優しく接してくれるなんて……本当にいい人だなあ、河本さんは。

第三者が見れば、河本がメイに好意を寄せているのはほぼ確実なのだが、当の本人はただの善意と信じて疑わない。ひたすら「いい人」と感動するのみ。

『天然最強（最恐）鈍感女』

とは、いつだったか同僚がメイにつけたあだ名だった。本人はそのあだ名の意味さえ理解できなかったのだけれど。

二人は他の職員がやってきたのをきっかけに外へ出た。まだ外は明るく、空にはほんのりと茜色あかねいろに色付いた雲が浮かんでいる。

じゃあ、お疲れ様でした、と言おうとしてメイが口を開きかけたところで、河本が「あの」どこか切羽詰まったような顔で声をかけた。

「あのっ、もしよかつたら、いや、これから用事がないようなら……食事にでも、行かない？」

思いもよらない誘いに、メイはきよんとして河本を見つめた。その途端、河本が慌てたように両手をぶんぶん振る。

「いや、その、美味しいって評判の店があるものだから、まだ今日は時間も早いし……えっと、そうだっ、谷村さんの全快祝いにつ」

取ってつけたような言い訳に、またしても『最強（最恐）鈍感女』ことメイは、純粹に感動してしまう。

河本さん、どこまでいい人なの……!! わざわざ後輩の風邪が治っただけで全快祝いだなんて!! 最強で最恐で、さらには最凶な鈍感女、谷村メイ。

これだから、絹はメイのそばを離れられないのだ、とは思ってもせずに。

「ありがとうございます」

メイは罪作りな、でも全く罪の意識のない満面の笑みを河本に向ける。彼の顔がふにやりと緩んだのなんて、まるで気がつきもしない。

「でも……」

「でも?」

メイの脳裏に権理と絹の顔が浮かぶ。きつと今日もメイの分の夕食を用意してくれているに違いない。突然外食するだなんて失礼な気がしてしまう。

「すみません。家で待っている人がいるので」

「い、い、い、家で待っている人!?」

メイの言葉に、河本は蒼白になってのけぞる。

「はい、何か?」

河本の驚きようにメイは首をかしげた。けれど、河本の次の言葉でその反応の意味を知る。

「谷村さんって、まさか同棲しているの!」

その言葉の意味が脳細胞に到着するまでたつぷり八秒。八秒後、メイは大いに慌てた。

「ち、違いますよ!! 実家の空いている部屋を貸しているんですっ」

「そ、そうなの?」

「そうですね、同棲なんかじゃありません」

何故か顔が火照る。しかも、何となく居心地が悪い。

「じゃあ……友達と一緒に住んでるの?」

「えー……っつと」

絹ちゃんは友達。これは間違いない。

でも、権理は? 友達じゃ、ないよね? もちろん恋人でもないし。じゃあ、セ、セフレ?

や、やだっ、そんなただれた関係はイヤー!!

浮かんだ考えに、メイは思わず河本の前だということも忘れて頭を抱えた。

「た、谷村さん?」

かけられた声にはつと我に返る。そして微妙な笑みを顔に貼りつけた。その途端、頭の中に一つの単語が浮かぶ。

——モトカレ。

そう、権理との関係はその一言に尽きる。カラダの関係はあっても、恋人じゃない。でも他人に

もなり切れない。逃げることも、突き離すことも……できない。

「そうなんです。友達と共同生活なんです」

モトカレと一緒に住んでいる、だなんて言えるはずもない。にっこり笑って答えたつもりが、メイだったが、その笑顔は明らかに歪みまくっていた。そして、そんな不自然な笑顔を河本が何か思案したような顔で見つめていたことに気がつく余裕もなかった。

「そっか……じゃ、また今度誘ってもいいかな？」

「もちろんです」

「よかった、じゃあお疲れ様」

「お疲れ様です」

自分とは反対側の駅を目指す河本の背中を見送りつつ、メイは久々に裏のない穏やかな優しさに触れたことに、何だか嬉しくなってしまった。

どうしようもなく、權理と河本を比べてしまっている自分に気がつかないまま。

それは權理の家庭教師初日のことだった。

「あ・な・た・あ、お帰りなさいっ」

「……」

訪れた秋月邸。樹奈の第一声に權理が石のように固まってしまったのは言うまでもない。

蕩げんばかりの笑顔の樹奈、その周りには無数のハートマークが飛び交っているような気さえず

る。それが錯覚だとは知りつつも、そんなものが見えてしまった自分の網膜を、權理は激しく呪ってため息をついた。

「……いや、むしろ自分が呪われたのか？」

とにかく目の前の樹奈は今まで見た中で一番のご機嫌さだ。「さ、先生入って」と、しかめっ面の權理の腕をぐいぐい引き寄せて部屋の中へと誘う。

そして、おそらく、きつと、絶対にわざとだろう。權理の腕にはむにやりと柔らかい感触のものが押しつけられている。むにゅ、むにゃ、と。メイほどの大きさはないものの、若さのおかげか弾力は相当なもの。……なんて考えた自分を、權理は再び激しく呪った。

『お嬢様の部屋』を絵に描いたようなその部屋は、可愛らしいもので溢れ返っていた。大量のクマのぬいぐるみが部屋中に鎮座し、その愛くるしいプラスチックの瞳全部が權理を見ているような気がして、思わず息苦しくなってしまう。

そんな權理の様子さえ、樹奈はあっさりいい方に勘違いしてみせた。

「先生。このクマさんたち可愛いでしょう？ 全部シリアルナンバー付きのプレミアもののデイベアなんだから。全部名前も付いてるのよ。……こつちがクマ吉、クマ美、クマティ。それから」

「秋月さん」

「はい？」

「時間も限られていますので、早速勉強を始めましょうね」

「えー？ まだ半分も紹介し終わってないのに」

「秋月さん」

「……はあい」

プチプチ言いつつも、素直に机の前に座る樹奈に、権理は心底ほっとする。これ以上クマの名前を聞かされていたら、「ネーミングセンスの欠片かけらもありませんね!!」とか、訳の分からないところでプチ切れてしまいそうだったから。

しかし樹奈が席に着いたことにはほっとしたのも束の間。再び権理はひどい頭痛に襲われる羽目となった。何故なら、樹奈があっさり従ったのにもちゃんと意味があったのだから。

……権理が自分の斜め後ろに立つことを予測し、上から覗けば下着まで見えてしまいそうな、きわどく胸元の開いた服を着ていたのだ。正面から見ればそうでもないものの、上から覗き込むと、その威力を遺憾なく発揮する代物しろもの。

侮あなづれんな。というか、そんな服どこで売ってやる。

心の中でひっそりと悪態をつく。樹奈の部屋に入ってきてさほど時間が経っていないというのに、権理の精神力はものすごい勢いで削り取られていた。疲労感が権理の両肩にずっしりとのしかかってくる。

「では、教科書を開きましょうか」

疲れを隠し切れない権理の声に、今度こそ樹奈が不満そうな声を上げた。

「えー!? 先生っ!! その角度から樹奈を見て、何の感想もなしなの!？」

「……」

「ほら、グツとくるよ、とか、ムラツとくるな、とか」

「……どこのおっさんだ。」

そんな言葉さえも盛大なため息とともに、どこかへ消えてしまう。ここは舞い上がりまくってはるか上空まで飛び上がってしまったっている彼女を、完全にスルーするのが一番だと判断する。

「……教科書を開きましょう。まずは本日の復習からです」

「感想は」

「教科担任が家庭教師をやって成績が下がりましたら、僕の教師生命の危機なんです」
わざとらしいほど困った表情を浮かべると、樹奈は急に背筋を伸ばして教科書を開く。

「そうね、そうだね。樹奈、頑張ります」

確かにその言動には疲れ果てるものの、基本的に素直な樹奈のことはあまり憎めない。つい、ふつと微笑ほほえんでしまう。あくまでそつと。

権理の持ち込んだ問題集に、樹奈は意外にも真剣に取り組んでいる。彼女がこつこつと解答を書き込んでいく音だけが部屋に響いた。

机のそばにベッドがあったものの、そこに腰掛ける気にもならず（油断したら飛びかかられそうで）、かといって樹奈の後ろに立つ気もしない（先生覗いているの？ キャツ」とか言われたら立ち直れない気がする）。だから権理は窓際に立って、もうすつかり暗くなった閑静な住宅街を眺めていた。お洒落な街灯が、オレンジ色の柔らかな光を投げかけてきている。

その灯りを見ていると……何故かメイを思い出した。

自分の前から鮮やかに消え去ったメイに近づき、相性のいいカラダを堪能して、彼女の戸惑う顔が見たい。最初はただそれだけのはずだった。その目的はとづくに達成しているというのに。権理はまだ谷村家から離れる気にまっただくならない。

それどころか、出ていってやるものかとさえ思っているほど。絶対に逃がしはしないだなんて、どろどろの独占欲にまみれている。

どこで何がどう変わって今に至るのか、実は権理にもよく分からない。ただ今はあの気持ちのいいカラダを誰にも渡したくないと思っただけは事実。それ以外の自分の気持ちなど……よく分からないまま。今更ながら自分のことを分析するのが苦手な己の性分を痛感する。

「……面倒だ」

「え？ 先生、何か言いました？」

テキストから目を上げた樹奈と視線が交わり、権理は一瞬、家庭教師中だったことを忘れていた自分に気がつく。

「いえ、秋月さん、できましたか？ 分からないところは？」

「えーっとね、ここがちよっと……」

さっと教師の仮面を被り、樹奈の答案を覗き込みながら、権理は自分自身に「集中しろ」と何度も言い聞かせる。

嫌な仕事でも、仕事には変わりない。そう気持ちを切り替えて。

自分の力だけで生きていくと決めたんだ。

いつか立てたそんな誓いを思い出せば、もう何年も顔を合わせていない父親の顔がふっと横切つて、思わず被った教師の仮面が剥がれ落ちそうになる。

これ以上ないほど深い皺を一瞬間に刻みつけ、権理は完璧な教師スマイルを浮かべて見せる。

「じゃあ、最初から一緒にやってみましょうか」

集中しろ。そう自分に言い聞かせながら。

地獄の九十分間を終え、権理はどっぶり疲れて谷村家を目指していた。

家庭教師の日は、学校から秋月邸の最寄り駅まで送迎があるので、愛車のバイクは谷村家に置いてきている。そのおかげで、谷村家の最寄り駅からは歩くしかない。最初は自宅まで送ると言われたが、そんなことになればもれなく下心満載の樹奈が付いてくるので、歩くしかない。

とにかく一刻も早く休みたいと、少し早足で家を目指した。

谷村家のすぐ手前の角を曲がった時、権理はふと家の前で佇んでいる人影に気がついた。いや、佇んでいる、というよりもそっと見上げているようだ。街灯の光の加減で顔はよく見えない。

何かこの家に用事なんだろうか。そう声をかけようと思った瞬間、その人影は急に動き出し、俯きがちに権理の横を通り過ぎていく。足早に。

「……なんだ？ この家に用事じゃないのか？」

そんな疑問とともに、権理は何となく引っかかるものを感じた。振り返り、角を曲がるようにして見る男を見る。くたびれた背広の後ろ姿が角を曲がって消えていった。

やはり権理の中でその背中は小さく引つかかって。けれど、疲労困憊の彼はその引つかりに気を留めるのも億劫で。

男の消えていった曲がり角を数秒見つめた後、灯りの漏れる谷村家のドアを開けた。

次の日の土曜日、そろって休みだったメイと絹は、ランチとショッピングを楽しむために出かけていた。一方権理も臨時の職員会議だとかで学校に行っており、仕方ないとはいえメイは少しばかり申し訳ないような気分になる。

二人が最近できたばかりの評判の店でパスタを食べ、お互いに似合いそうな服はないかとぶらぶら歩いていた時、絹の携帯が鳴った。少しの間話していた絹は通話を終えると、青ざめた顔をメイに向けてくる。

「ごめん、メイ!! アタシ、すぐに実家に帰らなくちゃ!!」

彼女には珍しく、携帯を手にわたわたと取り乱している。

「何かあったの? 絹ちゃん」

「あの、母さんが盲腸で緊急入院したらしくって……」

「ええ? 盲腸!?!」

「そうなのよ。盲腸は切れば治るからいいんだけど、うちの父さん、あれでしょ?」

そう言いながら苦り切った表情を隠そうともしない絹。その顔を見ながら、メイは彼女の父親のことを思い出した。昔気質の絹の父親は『男子、厨房に入るべからず』を地で行くような人で、台

所どころか家事を一切しない……というか、できない人なのだ。それをおっとりした優しい絹の母親が甲斐甲斐しくお世話をしていたという構図で。

「それ、お父さん大変なんじゃ……」

「頭痛くなってきたわ。米の炊き方だつて知らないのよ。下手したら、母さんのどころか、自分の着替えだつて用意できないかも……ああ、とにかく家に帰らなくちゃ」

「絹ちゃん、私も行こうか? 何かお役に立てることもあるかもしれないし」

メイの提案に、絹は苦笑いしながら片手を振る。

「いいのよ。ただの盲腸なんだから。それにすぐにでも病院に行かなくちゃ。入院手術となれば、用意するものもたくさんあるし」

「そっか、何かあったらいつでも言ってね」

「うん、ありがとね」

そう言っつて絹はメイの頭を何度か撫でた。そして、口では「ただの盲腸」とか何とか言いつつも、母親の入院に相当動揺しているのか、慌てて走り去ってしまった。けれど、少しして人ごみに消えたはずの絹が、猛ダツシュでメイのもとまで戻ってくる。

「言い忘れてたわ!! 下手したら今日は帰れないかもしれない。いい? 部屋に鍵かけてなるべく出ないようにするのよ? シャワーとかお風呂は権理のいない時にするようにっ。何かあったら、呼ぶのよ? すぐに駆けつけるから!!」

「ケダモノに気をつけるのよ」だなんて残響を残しつつ、今度こそ絹は人ごみに消えていった。

絹ちゃんのお母さん、何ともないといいけれど……

そんなことを思いつつ、メイは絹の消えていった雑踏を見つめた。

絹ちゃんも何ともないといいけれど……

明らかに動揺していた様子の絹を心配しながら、これからどうしようも途方に暮れる。

特にこの後の予定は立てていない。けれど、何となく一人で楽しむ気にもなれない。家に帰ろうかと駅に向かって歩き出そうとして、はっと足を止めた。

さつきはその慌てぶりに押されて彼女の言葉を聞き流してしまったが——そうだ、絹がないということとは権理と二人きりなのだ。あの、『ケダモノ宣言』した権理と!!

さあつと血の気が引いていく音がする。駅に向かっていた体を勢いよく回れ右させた。

そ、そうだ!! エリちゃんなら家にいるかもしれない、電話してみよう、電話!!

友人の顔を思い出し、メイは慌てて携帯を取り出す。

とにかく、権理と二人きりだと考えると、心臓がうるさいほどに騒ぎ出す。自分の家なのに、帰ることを躊躇して……いや、避けてしまいたくなるくらいに。

けれど、助けを求めるようにかけた電話は結局繋がらなくて。

三年前、権理とメイが出会うきっかけをくれたエリは、思いもよらない場所にいたのだから。

エリこと九条エリ子は、片手にケーキの箱をぶら下げ、もう片方の手でチャイムを押していた。

その玄関にかかっている表札は「谷村」。

そう、奇しくもメイがエリに電話をしていた頃、当の彼女はメイの家に向いていたのだった。

エリは、メイの家なのだから他の人物が出てくる可能性など考えてもいなかった。タイミング悪く留守ならば、当然誰も出てこないだろうと。だから玄関ドアが開いた時、エリは出てきた人物を見て、相当間拔けな顔をしてしまったのだった。

「……ええっ!? な、なんで!？」

エリを出迎えたのは、どこか冷たそうな眼鏡の男。涼しげな目を驚いたように見開き、彼女を見ている。

「……エリさん」

「か、権理君!？」

驚いたままの二人は、数分そこで立ち尽くしていた。

「驚いた。ここで権理君に会うなんて」

「……ここに居候させてもらっているんです。絹さんも一緒です」

とにかく立ち尽くしていてもどうしようもないからと、権理はエリを居間に通し、彼女の目の前に熱い紅茶を出したところだ。そして、何やら気まずそうな彼女を観察する。

……何を考えてる、こいつ。何か余計なことをするつもりじゃないだろうな。

そう思いながら心の中でちっと舌打ちするが、表面上は完璧に穏やかさを装う。感情を表に出さないのは、権理の特技と言ってもいい。ただ、自分の感情を隠すのは得意でも、相手の感情を読み

取るのは、この上なく苦手。エリが何を考えているのか分からず、イライラが募る。

「……絹も一緒って何よ。メイとヨリを戻したんじゃないの？」

どこか期待と不安の入り混じったような響きに、権理は眉を寄せる。

「言葉の通りですが。絹さんも一緒なんです。ルームシェアってやつですか？」

「なあんだ。せっかくあの二次会の日に、わざわざメイの住所まで教えただから、何か進展があったかと思ってたのに。がっかりだわ」

呆れたような口調。でも、エリは明らかに残念そうだ。

「……ところでエリさん、メイに何の用事ですか？」

そんなエリの表情に、実はハラワタがぐつぐつ沸騰中。けれど権理はにこやかに問いかけた。

「だ、から。権理君とメイがその後どうなったか偵察よ。私、二人にはヨリを戻してもらいたいの。ぜひとも」

「……余計なお世話です」

堪え切れず、こめかみに青筋が一本。

「まさかここまで権理君が手こずるなんて。てつきり、メイを取り戻しているものだと思ってたわ。あのプレイボーイだった権理君も、メイの天然は手ごわい？」

「だから、余計なお世話だって言ってるんです。……まさかとは思いますが、メイに余計なことを言うつもりじゃないですよね？」

につこり微笑ほほえんだままで、権理はエリを睨みつけた。その視線に気がつき、エリは肩をすくめる。

「言った方がいいと思うんだけど……その方が、権理君のためにならない？」

「俺のためになったとしても、メイを傷つける必要はありません」

そう即答すると、エリは少し目を見開き、そして苦笑いした。

「そう……権理君はいつだってそうよね。メイのことになると、急に慎重になる。だから、いじめたくなっちゃうのよ……」

そう呟つぶやいたエリの表情は、どこか悲しげで。権理もその表情に気がついたが、あえて見なかったことにする。

「ねえ、権理君。メイとヨリを戻す気はあるの？ ……ううん、そうじゃなくて、権理君は今でもメイのことが好きなんだよね？ だから今ここにいる。そうでしょう？」

「そんなこと……あなたには関係ないでしょう？」

「でも」

「だから、余計なお世話なんです」

自分でもよく分からないのに、とはさすがに口にはしなかった。これ以上突っ込まれても何とも答えようのない権理は、ぼつさりとエリの質問を切り捨てることで自分を守った。

好きか、と問われてもよく分からない。

振り回しているつもりで、振り回される今のこの日々が気に入っているのは嘘じゃない。

メイを縛りつけない、閉じ込めたい。

その思いがエリの言う『好き』という感情なのかどうか。どちらかというと、歪ゆがんだ独占欲のよ

うな気もする。

「……分かった。もう、余計なことは言わない」

問いかけの言葉も切り捨てられてしまったエリは、ため息とともに言葉を吐き出した。

「でもね権理君、私はやっぱりメイに話すべきだと思うの。あのことを。じゃなきゃ、メイはきっとこの先もあのことにこだわり続けちゃう……権理君だって不利よ。まあ、もしかしたら私が、罪悪感から逃れたいだけなのかもしれないけれど」

「そんな理由のためなら、いつそ記憶喪失にでもなつてください」

冷たく言い放てば、エリはまた苦笑いを漏らした。

「やっぱり……権理君はメイのことになると目の色が変わるわ」

「なっ……」

「私帰るね。メイよろしく。紅茶、ご馳走様でした」

権理に反論のタイミングを与えず、エリはさっさと立ち上がると居間を出ていく。権理は肩透かしを食らったような気持ちのまま、それでもエリを見送るために後を追った。エリが靴を履いて玄関ドアを開けようとした時、思いもかけずそのドアは勝手に開いた。

自動ドアでもないのだから、当然、誰か開けた人間がいるわけで。現れたのはメイだった。

「あれ!? エリちゃんっ、うちに来てたの? 何回も電話したんだよ」

「メ、メイ」

エリに電話をしても携帯は電源が入っておらず、自宅は留守電。他の友人にも連絡してみようか

と思ったものの、権理よりも先に帰宅して、部屋に籠る方が得策だろうとメイは家路を急いだのだ。た。

「ちょうどよかった。時間があるんでしよう? そうだ、夕食でも一緒にどう?」

にこにこしながら誘ってくるメイに、エリもにっこりと笑みを返す。それとは対照的にどこか表情を引きつけている権理に、メイは全く気がついていない。

「申し訳ないけれど、また今度ね。ちょっと近所に用事があっただけで、最初から長居するつもりなんてなかったんだから。それにしても、権理君がここにいたからびっくりしちゃったわ」

「そ、それはっ、単なる居候だよ。絹ちゃんも一緒だもん」

見る間に赤くなるメイに、エリは意味深に口の端を持ち上げた。

「ふうん……そうなの。で? その絹はどこ行つたの? 私、あんまり邪魔をするなって言っておくから」

「え? 邪魔って、何の?」

「いいの、いいの。気にしないで。で、絹は?」

「ああ、絹ちゃんは、お母さんが盲腸で緊急入院したらしくて、慌てて家に帰ったよ」

「まあ……それはそれは」

大袈裟に驚いて心配そうな表情をするエリだったものの、あまりにも大袈裟で、ある意味わざとらしい。けれど、もちろんそんなことに気がつくメイでもない。

「絹ちゃんも珍しく取り乱してたし、心配で」

「そうね。でも大丈夫よ、盲腸もつ腸なら切っちゃえば治るから。へえ、そうなの……」
ちらり、とエリが權理に視線を送る。それはそれはもう、なにか言いたげな面持ちで。

その視線を受け、權理があらさまに嫌そうな顔をした。メイもさすがにそんな二人のやり取りを不思議に思ったが、エリはすぐに何事もなかったかのように時計を見る。

「……あら、もうこんな時間。私帰って夕食の支度しなくっちゃ。じゃあメイ、またね。ケーキ買ってきたから、權理君と二人で食べてちょうだい」

「あつ、エリちゃ……」
ばたん。

言いたいことだけ言って、エリはさっさと出ていってしまった。結局メイにはエリが何をしに来たのかも分からないまま。けれど、学生の頃からエリは我が道を行くタイプなので、さほど気にもならない。

それよりも問題は……

「お帰りなさい、メイ」

そろりと振り返れば、ケダモノの気配を一切感じさせない微笑ほほえみの權理。

「た、ただいま。權理」

「エリさんが買ってきてくれたケーキでも食べませんか？ 紅茶を淹いれますよ。それともコーヒーにしますか？」

「えっと、紅茶の方がいい、かな」

「了解しました。では、メイはケーキの準備をしてくれますか？」

「はい」

エリとの会話を聞いていて、絹のことを知っているはずなのに、それについては口にもしない權理に、メイは拍子抜けしつつも中に入る。

キッチンに向かった權理が、ほくそ笑んでいることも知らないで……

權理の淹れてくれた紅茶を飲みながら、エリの持ってきてくれたケーキを食べていると、メイは単純に幸せな気持ちになってきた。美味しいものを食べていると、幸福感で警戒心の緩んでくる、大人として残念なメイ。すっかり權理と二人きりだということを忘れている。

「美味しいね、ケーキ」

「そうですね」

すっかりケーキも食べ終わると、さつきまで緩んでいた警戒心がむくむくと復活し始めた。途端に、メイは居心地が悪くなってくる。そして『自分の部屋に籠こもる』という当初の目的を思い出し、何食わぬ顔で立ち上がった。

「じゃあ、私は自分の部屋に……」

「ちよつと待ってください」

「ぎゃっ」

片手で優雅に紅茶を飲みながら、もう片方の手で權理がメイの手首をしっかりと掴んでいる。眼鏡

の奥から半眼で見られて、メイの心臓は大きな音をたてた。

「ぎゃっ、って何です。ところで、さっきの絹さんの話を詳しく聞きましようか」

ぐっ、とメイは息を呑んだ。詳しく話すとなると、多分、今日絹が戻ってこれないかもしれないということと言わなければならぬ。絹は帰ってくるつもりのようなようだったが、家族思いの絹のこと、今日は無理だろうとメイは思っていた。

そんな情報を、権理に告げるべきなんだろうか……狼の目の前で真っ裸になるようなものじゃないかと、メイは思ったりしてしまうのだ。

言い淀んでいると、掴まれていた手首がぐいと引つ張られ、メイは「ひゃあ」と間抜けな声を上げて権理の膝の上に捕えられてしまう。

「……ちよ!!」

「で、絹さんがどうしたんです？ 何か言いにくいんですか？ 言いやすいようにしてあげましようか？」

すすすつと、メイを拘束している権理の指先が、太ももをなぞる。その感触にメイは大いに慌てた。身を守りたいがために隠し事をして、我が身を危険に晒してしまっただけでは本末転倒もいいところ。「き、絹ちゃんはお母さんが、盲腸もちょうで入院して今日緊急手術になるって……」

「そうですか。で、何時頃に帰ってこれるそうなんです？」

「さ、さあー？ そのまで詳しくは……」

「さて。縛って自由を奪った上で、着てるものをひん剥きましようか？」

「ごっ、ごめんなさい!! 多分、帰ってこないと思います!!」

慌ててそう答えれば、びっくりするほど簡単に拘束は解かれた。

「最初からそう言っていればいいでしょう？ 夕食の準備があるんですから、人数が分からないと困るんです」

「う、うん。ごめん」

「さて、じゃあ夕食の支度に取りかかりますか」

さっさとカップなどを片付け始めた権理を横目で見つつ、メイはさっきまで掴まれていた手首をさすっていた。

物足りないと思ってしまう。あんな風に手を離されて、寂しいと。

あのまま拘束されても困るくせに、あっさり解放されるのは物足りないと思ってしまうなんて……

その物足りなさの意味が分からないほど、メイだってお子様ではない。そう、散々に快感を叩きこまれたカラダは、権理を求めてしまっている。

心ではこんなカラダだけの関係なんて、と思っっているのに、自分の中でじりじりとした熱あつが生まれているのを認めないわけにいかない。認めたくないけれど……

夕食は和やかに済み、全く下心もなさそうに過ごしている権理を見ると、メイはいたたまれない気持ちになった。

権理が自分のカラダだけにしか興味がなさそうだったのは、正直とても嫌だった。でも、カラダ

にさえ興味を失ってしまったんじゃないかと思うと、じれったいような胸のもやもやを感じるのだ。「わ、私、自分の部屋に戻るから。おやすみなさい」

「そうですか。じゃあおやすみなさい」

夕食の片付けも終わったところで、メイはまるで逃げるようにして自分の部屋に戻った。あっさり自分の部屋に戻れたことを、やはり心のどこかでがっかりしながら。

こんな変な気持ち、眠って忘れるのが一番よね……

まだ早いと思いながらも布団に入る。けれど、眠れないまま時間だけが虚しく過ぎて。

——どれくらい経っただろうか。

メイは携帯を居間に置きっぱなしだったのを思い出してそっと部屋を出た。

階段を降りると、居間には灯りがついたまま、テレビの音も漏れ聞こえる。けれど人の気配がない。不思議に思っただアを開けると、権理がソファに横たわっていた。

……寝てる？

足音を忍ばせて近づけば、静かな寝息を立てながら権理が眠っていた。お風呂上がりなのだろうか、白いTシャツにハーフパンツという見慣れないラフな恰好で。

静かに上下する体に、メイは思わず見入ってしまった。

ソファのそばで屈みこんで、眠る横顔を覗き込む。

彫刻のように整った顔。どこか冷たく見えるその顔も、眼鏡を取るだけで一変して優しく見える

ことをメイは知っている。びっくりするくらい、睫毛が長いことも。

睫毛、こんなに長くて眼鏡にぶつからないのかなあ。いいなあ、これなら付け睫毛なんて、絶対に必要ないよね。

なんて、余計な心配とちよつとの羨望を抱く。

どれくらいそうしていたのか、穴が開きそうなほどじいっと見入っていた自分に気がついたメイは、急に赤くなる。

おつ、女の私より綺麗な顔なんて卑怯すぎるわっ!! ついつい見入っちゃったじゃないのっ!!

慌てたように立ち上がって、背を向けてその場を去ろうとした。

けれど、それは叶わなくて。

「……男の寝顔を見るのが趣味なんですか？」

「!!」

振り返ると、薄く瞳を開き、口元を妖しげに持ち上げた権理に見つめられていた。あまりにもまっすぐな視線に、体が動かない。

「そ、その……、こんなところで寝たら、風邪ひいちゃうんじゃないかと思って」

睫毛がどうか思っていたくせに、言い訳だけは一丁前に口から出てくれる。

「だったらすぐ起こせばよかったでしょう」

「い、今、起こそうと思ってたんだもん」

「本当ですか？」

「本当っ。自分の部屋に戻って布団に入って寝たら？ 私も携帯を取りに来ただけだから」
わざとふいと權理から目を逸らして言い放つ。けれど、その一瞬の際に腰に腕を回すようにして引き寄せられる。

「……っひゃっ!!」

「こっちの布団の方がいいんですが」

權理の胸の上に乗っかる形になり、彼のくつくつと笑う振動がダイレクトにメイの心臓を刺激した。すぐに恐慌状態に陥って、言葉にならない叫び声らしきものを発しながら、じたばたと手足を振り回す。……多分、そのうちの「一」発は、權理にクリーンヒットしているのだろうが、焦るメイにはそれを確認する余裕もない。

「ああ、もう。いい加減静かに俺のモノになればいいでしょう」

「え？ ぎゃ、ぎゃあっ」

上と下のポジションを、いとも簡単に逆転される。

狭いソファの上、両肩がしっかりと押さえつけられて……

いつの間にか、あれほどじたばたしていた手足もおとなしくなっていた。意識したわけじゃなくて、射すくめられたように体が動かないのだ。

「……相変わらず、変な悲鳴ですね」

いつだったか聞いたことのあるようなセリフだと思った。

けれどそれを確かめることは叶わなくて。

覆いかぶさるように激しくキスをしてくる權理の、口内をかき混ぜる巧みな舌先は、メイの思考もドロドロにかき混ぜてしまったから。

「いつもみたいに嫌がらないんですか？」

激しいキスにしても、パジャマを捲り上げ、荒々しく白い素肌に舌を這わせても、抵抗らしい抵抗は見せない。それどころか甘い声を漏らすメイに、權理は怪訝けげんそうに声をかけた。

「やっとな俺のモノになる気になりましたか？」

「ちが……っ、やっ、ふあっ。そんなんじゃない……もん」

「じゃあ、一体どうしたっていうんです？」

胸の先を強く吸っていた權理は、音を立ててそこから口を離すと、まじまじとメイの顔を見下ろした。その視線を避けるように、メイはすつと目を逸らす。

さつきからそうだ。さつきからごまかすように顔をそむけたり、視線を外したりして、メイはまっすぐにこっちを見ようとはしない。

そんな態度を不思議に思う一方で、腹立たしくもなってくる。是が非でも、自分の方を見せ、自分のことだけしか考えられないようにしてやりたくなる。

「まあいいでしょう。それじゃ、いつまでも明後日の方向ばかり見てられなくしてやりますよ」
再びメイの白い肌を唇を寄せた時、彼女の言葉が頭上から聞こえてくる。

「どうして？ 今日一日、全然そんな……その、こんなコトしようとしなかったじゃない」

見上げたメイの瞳は何故だか不安げに揺れていて。けれど、權理にそんな彼女の気持ちなど分かるはずもない。

だから単純に、自分の計算通りになったのだとほくそ笑んだ。そのために、今日一日おとなしくしていたのだから。

「もしかして、俺に襲ってほしかったんですか？ 俺に全然その気がなかったことが寂しかったですか？ 自覚したでしょう？ カラダが俺を欲しがってるってこと」

何をバカなことを言ってるの!?

とか何とか喚きながら、茹でダコみたいに真っ赤になったメイが殴りつけてくるだろう……

そんな予想をたてて、權理はどこか面白そうに身構える。けれど、組み敷いたメイはじつと動くこともなく、ただ權理から視線を外したままで意外なことを口にしたのだった。

「……そう、かもしれない。悔しいけど、カラダは權理を欲しがってる。カラダ、だけは……」

言ってしまったから後悔したのか、メイは戸惑ったように唇を噛んでいる。

メイの発した言葉は望んでいたものに他ならないのに、何故か満たされないのを權理は感じていた。

メイが權理を欲しているという事実。

それなのに、逆に權理の心は、どうしようもない虚しさに支配される。

「へえ……じゃあ、とことん楽しませていただきましょうか」

「……っ!!」

言うが早いか、權理はメイの胸元に顔を埋めた。

いつもよりも荒々しく柔らかな胸を揉みしだく。權理の手の中で、面白いように大きな胸が形を変えた。薄ピンクの頂を強めに噛めば、メイのカラダは電気ショックを受けたかのようにびくんと跳ね上がる。

「あ、ああ、は……」

頬をバラ色に染め上げ、与えられる快感に既にのめり込んでいるメイ。その感じやすいカラダが、今は何故か腹立したい。

「こんなふう……」

「え？ ふぁ……!!」

締め付けの少ないパジャマのズボンには、簡単に權理の手を迎え入れてしまう。性急な動作で權理は下着の中に手を入れ、まだあまり湿っていないそこを指でなぞる。

「誰にでもいい声を聞かせていたんですか？」

口に出してしまえば、それは確実に棘のように權理自身を突き刺した。

メイの感じやすいカラダ。このカラダをこうして悦ばせてきた他の誰かがいるんだと思うと、それこそハラワタが煮えくりかえるような怒りに支配される。

「感じやすいですもんね、メイは……」

なぞるだけで、メイからは簡単に蜜が溢れ出す。

ぬるぬると蜜を纏わせた指を引き出して、權理はメイに見せつけるようにその濡れた指を舐めて

見せた。恥ずかしさに震え、泣き出しそうな表情で、メイはやつぱりそっぽを向いたのだった。

恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい……!!

そう思っても、メイには既に火のついてしまったカラダを止めることはできない。それどころか自分のカラダが權理を求めていることに気がついてしまったから、いよいよ拒絶する気力も湧かなくなつた。

なのに、『誰にでもいい声を聞かせていたんですか?』だなんて、意地悪な質問をされて。

冗談じゃないわ!! こっちは不感症じゃないかって本気で悩んだんだから!!

そう思うのに、それはもう声にならない。ぐちゃぐちゃと音をたてながら感じる場所をかき混ぜられれば、思考さえも一緒にぐちゃぐちゃにされてしまう。

不感症に加えて、潔癖症かもしれないって悩んだのに!!

どろどろに溶かされつつある思考。けれど、そんな不満たらたらな思いだけは、簡単には溶け出さないように。

「……ッ!! あっ、あああっ、あ、あ、ああ……っん!!」

一気に開かされた両足。その間に權理の頭が埋まっている。

舌先が細かく蠢きながら、メイの一番敏感な部分を刺激する。それだけでも突き抜けるような快感に襲われた。

まるで動物が水を飲むような音をたてながら、メイから溢れ出た蜜を權理が舐めとっている。

權理と別れてから何人かの男性と付き合つた。不感症じゃないかと思うくらい満たされなかった上に、メイは自分の体を舐められることに激しい抵抗を感じていた。

一言で言ってしまうえば、『イヤ』だったのだ。

だからもう、そんな自分はどうしてもセックスなんてしない方がいいんだと思つていた。

なのに、なのにどうして……

「や、やあ……っ、も、そんなに、され、たらあ」

足の間に埋まっている權理の頭をぎゅっと押さえつける。指先に触れる柔らかな髪の毛の感触を楽しむ余裕なんてこれっぽっちもない。

もうさつきから、与えられる刺激に跳ね上がり、硬直するカラダが苦しくて仕方ない。それを知つてか知らずか、權理のしなやかな指が一気に奥の方まで差し入れられた。急激な快感の変化についていけず、メイはうっと思を詰める。

「そうやって男を惑わしてきたんですか? 悪い子ですね……俺だけに縛りつけられていればいいんですよ」

口元をメイの蜜で濡らしたまま、權理がにやりとアクマのように微笑む。

その笑顔にメイの心臓は壊れそうなほどの激しい音を立て、思わず眩暈を起こしてしまう。

少しも抵抗なんて感じない。

少しも……イヤじゃない。

どうして權理以外の誰かでは感じられなかったのか不思議に思うほど、快感に支配されるカラダ。

「あつ、あああつ!! あ、あ、ああんツ!!」
ぐいっと権理がメイのナカに侵入してくる。

その途端に、このカラダがどれだけこの瞬間を待ちわびていたのかはつきり思い知らされてしまった。無意識のうちに下肢に力が入り、権理を締めつける。

「……くっ」

見上げた権理は苦しげに眉を寄せていて。

囚われているのは自分だけじゃないんだと思えば、心底嬉しくなるのに……それなのに、権理が欲しいのはこのカラダだけなんだと思うと、心は冬の海に投げ込まれたかのように、痛みを伴って凍りつくのだった。

すっかりすっきりして眠り込んでいるとばかり思っていたのに。

すかーすかーと、気持ちよさげな寝息を立てていたはずなのに。

「どーこーへ、行くつもりなんですか?」

「!!」

大体にして一気にあれだけの時間——諸々含め、約二時間、激しい運動をしておいて、まさかまたこのパターンで捕まろうとは、さすがのメイも思っていなかった。

「ね、寝てたんじゃっ」

「寝てましたよ」

闇の中で権理が目を擦る。場所は居間から権理の部屋に移動していた。さすがにソファで二人一緒に休むには狭すぎるということだ。

もちろん、権理の部屋でただ休むだけでは済まなかったことは言うまでもなく。

とにかくあれだけの運動をさせられたメイは、すっかり汗やその他のものでべたべたになってしまったカラダを、熱いシャワーで洗い流してしまいたかった。

ついでにパジャマも着たい。いつぞやのように、また風邪など引きたくはない。

「で、メイはどこに行くつもりです?」

「……シャワーを浴びたいの。体がべたべたで寝付けなくて。それにパジャマも着ないと、また風邪ひいちゃうから」

そう言ったところで、正直権理が掴んだ腕を離してくれるとは思っていなかった。いつだったかは、権理の部屋から脱走しようとして、まんまと次ラウンドに持ち込まれた苦い経験もある。

けれど権理は意外にもあっさりと手を離れた。

「どうぞ」

「え? え? いいの?」

自分の家でシャワーを浴びるだけなんだから、同居人の許可など必要ないに決まっている。すっかり権理に毒されかけて、一般常識さえも見失いかけてるメイ。

いや、どうぞと言われて単純に目を輝かせているあたり、毒されかけている、というよりもすっかり毒されている。